



## Anniversary Commemorative Cruise 瀬戸内海汽船 シースピカ

記念式典の翌日は、式典会場の前の桟橋から、記念クルーズ(第20回スマートクルーズアカデミー)として、シースピカをチャーターし、瀬戸内の島々をめぐるしました。

### 瀬戸内海汽船株式会社 代表取締役社長 仁田 一郎 さま

SEA SPICAは、瀬戸内シーライン株式会社(瀬戸内海汽船グループ)が運航する「せとうち観光型高速クルーザー」である。瀬戸内海を航行する客船の多くが本州と四国をつないでいる中、SEA SPICAの航路は広島港(宇品)と三原港を結び、大久野島や瀬戸田、下蒲刈島、御手洗の町並みなどに立ち寄り、島めぐりに適した「瀬戸内しまたびライン」(航路名称)となっている。したがって、船内の雰囲気は旧来の高速船と大幅に異なる。例えば、座席はソファ型で船窓からの景色が見えやすい方向で設置されているほか、2階にはテラス席も設けられている。SEA SPICAは、船舶共有建造制度活用

による「国内クルーズ船」の適用第一号案件であり、JR西日本グループと瀬戸内海汽船グループが協同で設立した株式会社瀬戸内島たびコーポレーションと鉄道・運輸機構の共有船となっている。SEA SPICAにとっては、島めぐり観光というコンテンツが不可欠であり、コンテンツの充実には航路周辺の地域との連携・協力が欠かせない。今後は、島や船でのワーケーションやサイクリングなどの体験型コンテンツを増やしていきたい。現在、島と島をむすぶ「橋」に着目した観光ツアーの可能性についても検討している。

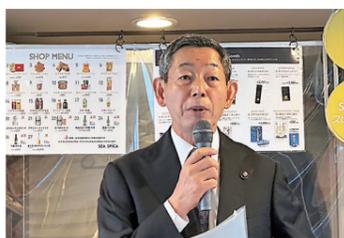
### 呉市長 新原 芳明 さま

はじめに、呉市の紹介をしたい。呉は言わずと知れた戦艦大和の母港であるが、そ

の理由は、瀬戸内海の地形と呉の位置にある。瀬戸内海は島が多く浅瀬も多いため、大きな艦船が通過できる航路は限られており、瀬戸内海の真ん中に位置する呉からは、航行する艦船がすべて見渡せる。そのことから、今でも海上自衛隊呉基地や海上保安大学校が立地している。戦前は「海軍さん」の町として非常に栄えていた呉は、戦後には海軍工廠の技術を活かした重工業で日本の経済成長を支えることとなる。現在でも、造船技術を活かして航空産業に関わる企業も立地している。本日SEA SPICAが寄港する予定の御手洗地区(大崎下島)と下蒲刈島はどちらも呉市であり、瀬戸内海の広い範囲が呉市に属しているため、来年度に計画されているポナン社のクルーズには大きな期待を寄せているほか、ラグ



瀬戸内海汽船社長 仁田 一郎 さま



呉市長 新原 芳明 さま



せとうちクルーズ総支配人 小林 敦 さま



SEA SPICA：瀬戸内海のさらなる活性化を目指す皆さんに見送られて

ジュアリークラスのクルーズの誘致に市としても積極的に取り組んでいきたい。本日はあいにくの雨天だが、外国から訪れた方にはこの景色が「墨絵のように見える」とのこと。ぜひ景色を堪能していただきたい。

### 株式会社せとうちクルーズ 取締役 総支配人 小林 敦 さま

「ガンツウ」とは、瀬戸内海近郊で食されている蟹の名前で、瀬戸内近郊の方に親んでいただきたいという想いを込めて命名した。2017年に就航し、今年で6年目を迎えているが、日本人だけでなく外国人からの予約も増えている。「海の上に漂う旅」というオリジナリティの高いスタイルが受け入れられ、定着してきているようだ。「海の上に漂う旅」について説明したい。本船の分類はクルーズ船であるが、当社としては「海の上の船宿」というイメージでサービスを提供している。したがって、出港後の寄港はなく、3~4日全てを船内で過ごすこととなる。そのため、食事には大変力を入れている。瀬戸内海では、昔から船上で

他の船から食材を直接買い付けていたようだが、本船で提供される食材もそのようにして買い付けている。乗船客自らが食材を選ぶことができるだけでなく、調理方法も選ぶことができ、それぞれ異なった料理を提供することもできる。また、「海の上の船宿」のイメージに合った船にするため、木材をふんだんに使用した船体になっている。今後、瀬戸内海を未来につながるような海にしていきたいと考えている。

### 寄港地紹介1(御手洗)

寄港地研修では、12~15人程度のグループに分かれ、御手洗地区(大崎下島)の街歩きを楽しんだ。御手洗という地名は、菅原道真が大宰府に流される途中に手を洗った井戸があるという逸話に由来しており(諸説あり)、地区の中には御手洗天満神社が静かに佇む。御手洗の発展は江戸時代に入ってからである。風待ち・潮待ちの港として多くの船が寄港するようになると大きく栄え、豪商も多く誕生した。明治以降に、風待ち・潮待ちが必要なくなると港としての役割を終えたものの、かつての賑わいがうかがえる町並みが残っていたため、近年再び注目されるようになった。特に、豪雨の影響を調査した際に、その町並みが専門家に評価されたことが大きい。江戸、明治、大正時代の建物が多く現存していることから、国の重要伝統的建造物保存地区に選定されているほか、4年前には日本遺産にも認

定されている。インバウンド対応として、単に案内板を設置するだけではなく、スマートフォン専用の多言語観光案内サイトへのアクセスを促す「多言語おもてなしタグ」が設置されていた。一方で、御手洗地区の人口は減少する一方であり、空き家対策が大きな課題となっている。

### 寄港地紹介2(下蒲刈)

下蒲刈島でも、下蒲刈ガイドの会の方から説明を受けながら街歩きを楽しんだ。下蒲刈島は春蘭が自生していたことから「蘭島」とも呼ばれ、江戸時代には朝鮮通信使の宿泊地の一つでもあった。江戸時代には朝鮮通信使が12回来日しているが、そのうち11回は下蒲刈島に宿泊したとの記録が残る。よって、武家屋敷や御番所などの木造建築が建てられ、それらが今も残っている。一方で、御手洗地区(大崎下島)と同様に、明治以降に港としての役割を終えると次第に寂れていくことになる。蘭島閣美術館は、観光による島の活性化を目指して建てられたもので、寄港地研修で立ち寄った際は、立体切り絵アーティストの作品が特別展示されていた。繊細な立体切り絵に多くの参加者が感銘を受けていた。なお、蘭島閣美術館をはじめ、回遊式庭園で有名な松濤園、御本陣跡、御番所跡、朝鮮通信使宿館跡など、多くの文化施設が港付近に立地しており、街歩きには非常に適している。



下蒲刈：素晴らしい風景に加え、芸術作品も楽しむことができました。



御手洗：ガイドの説明とともに、これまでの歴史を学ぶことができました。

